

令和七年度花卷市民芸術祭

第十九回文芸大会作品集

一般の部

花卷市民芸術祭実行委員会

第 20 回花巻市民芸術祭第 19 回文芸大会入賞者

と き 令和 7 年 11 月 15 日
 ところ 大迫ふるさとセンター

<短歌>

作品募集の部	天位	関 園子
	地位	山同 英
	人位	平沢 裕子
当日詠の部	互選最高点歌賞	関 園子
	多田 聡子 選	特選 熊谷 敏子

小・中学生の部 奨励賞

一小学校一	笹間第一小学校	6 年	猫塚 心麗
	笹間第一小学校	6 年	村上悠之進
	笹間第一小学校	6 年	八重樫詩琉
	笹間第一小学校	6 年	伊藤 遙音
一中学校一	大迫中学校	2 年	阿部 圭吾
	湯口中学校	2 年	久保田 蓮
	湯口中学校	2 年	高橋 瑤葵
	花巻北中学校	2 年	細川 航汰
	花巻北中学校	2 年	赤崎 希美

<俳句>

作品募集の部	団体賞	花城文芸
	大畑 善昭 選	特選 高橋 和枝
	畠山 濁水 選	特選 市川 和子
	安部 克詠 選	特選 藤本 奈々
	武田 稲子 選	特選 後藤 冴子
	佐々木みき子 選	特選 武田 稲子
	高橋 和枝 選	特選 安部 克詠

当日句の部	互選最高点句賞	高橋 和枝
	大畑 善昭 選	特選 栗城 静子
	安部 克詠 選	特選 武田 稲子
	武田 稲子 選	特選 藤本 奈々
	高橋 和枝 選	特選 武田 稲子

小・中学生の部 奨励賞

—中学校—	湯口中学校	3年	鈴木 彩華
	花巻北中学校	3年	小野寺碧花
	大迫中学校	3年	佐々木珠莉
	花巻北中学校	3年	藤原 幸暉
	花巻北中学校	3年	小川 剛

<川柳>

総合	1位	山口 耕作		
	2位	宮野 清子		
	3位	及川洋一郎		
宿題 「壁」		及川洋一郎 選	特選	山口 耕作
宿題 「飾る」		塩釜アツシ 選	特選	宮野 裕
宿題 「青い」		畠 美香 選	特選	有原 すみれ
宿題 「自由吟」		あべ 和香 選	特選	宮野 清子
席題 「窓」		有原すみれ 選	特選	藤川 忠巳
席題 「ワイン」		宮野 裕 選	特選	及川洋一郎

<詩>

作品募集の部	芸術祭賞	「時の欠片」	英 阿音子
	優秀賞	「記憶」	有原すみれ
	奨励賞	「空がほしい」	永田 豊
	佳作	「笑い話」	朝倉 了子
	佳作	「ひそんでいる残酷心」	伊藤 諒子
	佳作	「愛犬」	河津詠太郎

小・中学生の部

—中学校—	奨励賞	「えんぴつ」	大迫中学校	1年	伊藤 舞夏
	奨励賞	「花火の夜」	湯口中学校	1年	佐々木愛莉
	奨励賞	「輝く月」	花巻北中学校	1年	福地 優花
	奨励賞	「あさがお」	湯口中学校	1年	高橋 咲陽
	奨励賞	「夜のおやつ」	花巻北中学校	1年	小原 真子
	奨励賞	「筆箱のなかみ」	大迫中学校	1年	吉田 茉叶

<随筆>

作品募集の部

芸術祭賞

優秀賞

奨励賞

佳作

佳作

佳作

「道」

「短歌を始める」

「上条恒彦と労音」

「キャットシッター」

「マジックアワー」

「一軍を照らす存在」

花巻南高等学校

大森 憲孝

高橋恵理子

藤原 洋三

多田 聡子

英 阿音子

川上莉緒菜

目次

一、隨筆	一、詩	一、川柳	一、俳句	一、短歌
------	-----	------	------	------

P	P	P	P	P
22	16	10	2	1
}	}	}	}	}

令和七年度花巻市民芸術祭第十九回文芸大会

「短歌」 作品募集の部 入選作品

天位

イギリス海岸は白亜紀曝す波の音太古の声を目つむりて聞く

関 園子

地位

生きおれば宮沢賢治何語る稲の代わりにソーラーパネル

山同 英

人位

解体の隣家の更地寒々と時雨に濡れて小菊ひともと

平沢 裕子

当日詠の部 入選作品

互選最高点歌賞

秋の夜のひとこと言へばひと言の返りて二人静かに更ける

関 園子

特選

多田 聰子 選

早池峰の伝統なるや岳神楽若き舞手の頼もしきなり

熊谷 敏子

令和七年度花巻市民芸術祭第十九回文芸大会
「俳句」 作品募集の部 入選作品

入選

日本海夕日まるごと飲みこめり

(新樹の会) 関 園子

戦なきにつぼんの空八月来

(東和) 武田 稲子

卷尺の戻り一瞬天高し

(如月会) 市川 和子

馬の眼の駆け出す準備牧開き

(花城文芸) 井形 幸江

逆縁の悲しみに耐へ生身魂

(あしたば) 栗城 静子

ここに来て好天つづき小豆干す

(如月会) 高橋 和枝

北上川越ゆる帰燕の高さかな

(如月会) 上野 節子

喜雨来るやにはに畑の土けむり

(新樹の会) 菅原砂登子

七日日や母の言いつけなつかしく

(花城文芸) 高橋 孝司

葛の花胸をかすめる遠い恋

(東和) 多田ゆう湖

大畑 善 昭 選

特選

ぶつかってころがつて水澄みにけり

(如月会) 高橋 和枝

秀逸

螢飛ぶ闇に水音ありにけり

(あしたば) 栗城 静子

トタン屋根タップダンスの大夕立

(東和) 藤本 奈々

一雨の今朝のやうやく大根蒔く

(東和) 佐野 信子

安部克詠選

特選

独り身が身重の如くすいか抱き

(東和)

藤本 奈々

入選

螢飛ぶ闇に水音ありにけり

(あしたば) 栗城 静子

悼むとは語らふことよ草の花

(新樹の会) 後藤 冴子

早池峰の空を震はす夏神楽

(新樹の会) 後藤 冴子

洗いたる硯の香る星の夜

(東和) 小原 貫之

七日日や母の言いつけなつかしく

(花城文芸) 高橋 孝司

秀逸

剥き出しのイギリス海岸油照り

(花城文芸)

井形 幸江

山の湯へ錦秋の画布ひろがれり

(あしたば) 佐々木みき子

卷尺の戻り一瞬天高し

(如月会) 市川 和子

炎暑まだだと予報士ふと憎し

(花城文芸)

伊藤 明美

馬の眼の駆け出す準備牧開き

(花城文芸) 井形 幸江

栗笑んで造化の妙の色こぼす

(如月会)

大畑 善昭

新米や生家年々遠くなる

(如月会) 高橋 和枝

紅葉葉や池に映りて池に散る

(花城文芸) 清水 嘉信

武田 稲子 選

入選

特選

悼むとは語らふことよ草の花

(新樹の会) 後藤 冴子

月影や不安はいつも唐突に

(新樹の会) 関 園子

巻尺の戻り一瞬天高し

(如月会) 市川 和子

残照の法師蟬聴く六地藏

(花城文芸) 照井 孝司

千の風葡萄畑を吹き抜けぬ

(花城文芸) 清水 嘉信

剥き出しのイギリス海岸油照り

(花城文芸) 井形 幸江

闇遙か手話のごとくに遠花火

(花城文芸) 安部 克詠

秀逸

気疲れの残りしままの髪洗ふ

(あしたば) 栗城 静子

新米や生家年々遠くなる

(如月会) 高橋 和枝

洗いたる硯の香る星の夜

(東和) 小原 貫之

栗笑んで造化の妙の色こぼす

(如月会) 大畑 善昭

早池峰の空を震はす夏神楽

(新樹の会) 後藤 冴子

人絶へし家に緋の色凌霄花

(東和) 多田ゆう湖

佐々木みき子 選

入選

日本海夕日まるごと飲みこめり

(新樹の会) 関 園子

残照の法師蟬聴く六地藏

(花城文芸) 照井 孝司

炎暑まだまだと予報士ふと憎し

(花城文芸) 伊藤 明美

夏終る砂は球児の涙吸ふ

(花城文芸) 安部 克詠

あつと見むハンドルさばきこぼれ萩

(東和) 菊池 若菜

北上川越ゆる帰燕の高さかな

(如月会) 上野 節子

トタン屋根タップダンスの大夕立

(東和) 藤本 奈々

登高や通信使船の見える寺

(あしたば) 蛸沢 秀一

喜雨来るやにはに畑の土けむり

(新樹の会) 菅原砂登子

握手して一会の人に葡萄の香

(如月会) 大畑 善昭

特選

村に生き村に死するか生身魂

(東和) 武田 稲子

秀逸

剥き出しのイギリス海岸油照り

(花城文芸) 井形 幸江

現し世のめまぐるしさよ盆灯籠

(花城文芸) 高橋 孝司

下校子の歩みとめたる蟻の列

(あしたば) 佐々木敦子

入選

逝く秋の切株に日の渡りけり

(如月会) 上野 節子

島 山 濁 水 選

特選

卷尺の戻り一瞬天高し

(如月会) 市川 和子

秀逸

盆提灯世は儚しと風に揺れ

(花城文芸) 葛巻 学

深山は風生むところ初わらび

(花城文芸) 澤田 裕

早池峰の空を震はす夏神楽

(新樹の会) 後藤 冴子

高橋和枝 選

入選

村に生き村に死するか生身魂

(東和) 武田 稲子

巻尺の戻り一瞬天高し

(如月会) 市川 和子

盆提灯世は儚しと風に揺れ

(花城文芸) 葛巻 学

浮き足立つ祭囃子がすぐそこに

(花城文芸) 伊藤 明美

楽しみはお盆迄だねぽつねんと

(東和) 菊池 若菜

珠算塾の生徒六人小鳥来る

(如月会) 上野 節子

かりがねの近づく声の朝餉かな

(東和) 小原 貫之

洗いたる硯の香る星の夜

(東和) 小原 貫之

悼むとは語らふことよ草の花

(新樹の会) 後藤 冴子

ウインドーに暖色の服秋麗

(新樹の会) 菅原砂登子

特選

盆帰省みやげは一人子が増えて

(花城文芸) 安部 克詠

秀逸

老木の柿の実灯す入り日かな

(花城文芸) 照井 孝司

螢飛ぶ闇に水音ありにけり

(あしたば) 栗城 静子

野良着の娘そつと紅さす秋祭り

(東和) 熊谷 森子

当日句の部 入選作品

大畑 善昭 選

特選

秋刀魚船吃水深く帰港せり

栗城 静子

秀逸

字足らずのようなひとり居夕時雨
眠られぬ獣を放ち山眠る
うす紙のやうな昼月落葉揺く

武田 稲子
多田ゆう湖
上野 節子

入選

新刊の「どつどつどどうど」秋高し
艚も櫓もなくて舟漕ぐ日向ぼこ
明日ころが孵化の気配の玉子茸
早池峰山の稜線跨ぐスーパームーン
柿の秋蔵にワインを眠らせて
鬼火知り文学を知り桐一葉
頬杖のためセーターの肘当ては
冷やかやや名医つれなく加齢です
炊きたての湯気をまづ吸ふ今年米
蓮枯れてくまなく夕日渡りけり

後藤 冴子
高橋 和枝
畠山 濁水
安部 克詠
後藤 冴子
畠山 濁水
高橋 和枝
武田 稲子
安部 克詠
上野 節子

特選

安部 克詠

選

字足らずのようなひとり居夕時雨

武田 稲子

秀逸

明日ころが孵化の気配の玉子茸
艚も櫓もなくて舟漕ぐ日向ぼこ
日和ぼこ話上手の婆の輪に

畠山 濁水
高橋 和枝
関 園子

入選

握手して一会の人に葡萄の香
頬杖のためセーターの肘当ては
冷やかやや名医つれなく加齢です
早池峰の麓ふもとに集ひ秋深む
早池峰を抱く両手に小晴空
小春日や循環バスの遠回り
小春日のころころと宿場町
うす紙のやうな昼月落葉揺く
抱へゆく翔平案山子等が追ふ
目の隈が齢を語る冬来たる

大畑 善昭
高橋 和枝
武田 稲子
栗城 静子
多田ゆう湖
蛭沢 秀一
武田 稲子
上野 節子
栗城 静子
葛巻 学

特選

武田 稲子 選

早池峰へ染みわたるよな神楽笛

藤本 奈々

秀逸

新刊の「どつどつどどうど」秋高し

後藤 冴子

早池峰の麓ふもとに集ひ秋深む

栗城 静子

ねんねこの中や宇宙を見てゐる目

高橋 和枝

入選

百歳ももとせの瑠璃の歪みや床紅葉

蛭沢 秀一

破れ目を季が覗いて秋簾

安部 克詠

鳥舞の八の字八の字に山粧ふ

熊谷 森子

通草の実大きく割れてデンデラ野

上野 節子

眠られぬ獣を放ち山眠る

多田ゆう湖

鬼火知り文学を知る桐一葉

畠山 濁水

うす紙のやうな昼月落葉搔く

上野 節子

秋刀魚船吃水深く帰港せり

栗城 静子

炊きたての湯気をまづ吸う今年米

安部 克詠

蓮枯れてくまなく夕日渡りけり

上野 節子

特選

高橋 和枝 選

冷ややかや名医つれなく加齢です

武田 稲子

秀逸

落葉搔くいちやう落葉の金を搔く

大畑 善昭

字足らずのようなひとり居夕時雨

武田 稲子

よろけてる吾と同じだ冬の蠅

清水 嘉信

入選

突風前触れ冬將軍到来

葛巻 学

一日がたちまち終る岳神楽

清水 嘉信

通草の実大きく割れてデンデラ野

上野 節子

早池峰山の稜線跨ぐスーパームーン

安部 克詠

鬼火知り文学を知る桐一葉

畠山 濁水

うす紙のやうな昼月落葉搔く

上野 節子

握手して一会の人に葡萄の香

大畑 善昭

四季一つ飛ばし来たるか寒さ急

市川 和子

神の留守知るや知らずやわらべうた

蛭沢 秀一

蓮枯れてくまなく夕日渡りけり

上野 節子

互選最高点句賞

艚も櫓もなくて舟漕ぐ日向ぼこ

高橋 和枝

令和七年度花巻市民芸術祭第十九回文芸大会

「川柳」 作品募集の部 入選作品

佳作

連れ合いの笑窪借りたい時がある

及川洋一郎

宿題「飾る」

塩釜 アツシ 選

着飾って内科眼科とハシゴする

英 阿音子

パンドラの箱を飾った包装紙

あべ 和香

特選

誕生日飾り包丁入れた鯛

中村 眞子

金の要る音で無沙汰のメール来る

宮野 裕

七夕のみんなの願い重たそう

丹野ウメ子

秀逸

飾るほど老いがあちこち零れ出す

有原すみれ

ひっそりと空家の庭を飾る花

畠 美香

暑さには負けぬあざみの夏帽子

宮野 清子

姿見に三度戻ってクラス会

蛭沢 秀一

着飾ってみても隠せぬ陽焼けの手

宮野 清子

文化祭所狭しと自信作

高橋みか子

モナリザもゴッホも飾る四畳半

英 阿音子

野良着にも着飾る気持ちと自尊心

村松 歩

宿題「壁」

及川 洋一郎 選

特選

この壁を越えれば見える未来地図

山口 耕作

秀逸

意地っ張り見えない壁が邪魔をする

高橋みか子

老の壁援助もあつて共に生き

丹野ウメ子

壁は無い二人暮しに広い家

島 美香

佳作

ご近所の噂に早い壁の耳

小田島花浪

白壁の和の古民家で酌み交わす

清水 嘉信

遠く聴く壁の向こうの平和論

あべ 和香

バンクシー様この壁は予約済

蛭沢 秀一

壁ドンに羽交い締めされ終る恋

蛭沢 秀一

世の壁にとじこもりあり離職あり

丹野ウメ子

保護ネコを飼うにも有った歳の壁

有原すみれ

年毎に壁がどんどん高くなる

宮野 清子

落書きをされて目じりを下げる爺

藤川 忠巳

ピン跡の壁を見つめる我が軌跡

藤川 忠巳

宿題「青い」

畠 美香 選

特選

核保有青い地球が揺れている

有原すみれ

秀逸

青田買い居心地悪い備蓄米

山口 耕作

齢老えどちつともぶれない青写真

山口 耕作

こんには足許にいた青い鳥

宮野 清子

佳作

もうこはん
蒙古斑付けた二歳の直談判

村松 歩

古井戸の底に昭和の青い空

宮野 裕

青二才と言われ続けた自分流

中村 眞子

立ち読みの頁に拾う青い空

あべ 和香

血だらけの地球を青く戻したい

あべ 和香

ほろ苦い青春ドラマセピア色

藤川 忠巳

青色は孫と私を繋ぐ色

戸来 明子

彼の国の赤くて青いタリフマン

蛭沢 秀一

笑顔でね青い空から母の声

高橋えり子

勇気出し夢路描いた青い空

高橋えり子

宿題「自由吟」

あべ 和香 選

佳作

人生を楽しむヒント人と縁

高橋えり子

特選

東京を捨てて帰った赤い靴

小田島花浪

建前に本音を少し混ぜてお茶

宮野 清子

年齢は不詳私の生きる日日

及川洋一郎

秀逸

ユーモアは元気の源笑いあり

戸来 明子

打ち壊す本丸どこだ米相場

蛸沢 秀一

角砂糖ひとつ増やした妥協案

宮野 裕

歳重ね苦い経験宝物

高橋えり子

世界中安眠できる日を望む

高橋みか子

星占い不思議な縁と思う人

宮野 裕

思い出を心に留めて箱の中

戸来 明子

今やっと気づくことあり親心

畠 美香

罪は無い忘れてケロリ母百寿

藤川 忠巳

のほほんと生きた証に皺も無い

村松 歩

席題の部 入選作品

席題 「窓」

有原 すみれ 選

特選

戦地荒れ窓を伝うは涙雨

藤川 忠巳

秀逸

窓拭きを終えて午年展望す

高橋みか子

仏壇も窓も私の愚痴を聞く

及川洋一郎

窓に雪冬眠できぬ親子グマ

照井 地蔵

佳作

ちっちゃな秋心の窓は彼岸花

山口 耕作

サッシ窓開けて名月入れて酌み

宮野 裕

銀行の窓をあければクマの跡

照井 地蔵

秋晴れを願うよ月が昇る窓

及川洋一郎

背伸びしてペットの柴が窓に立つ

高橋みか子

台詞まだ覚えぬ内に窓の雪

宮野 裕

明かり取り冬の天窓雪景色

畠 美香

窓枠のまん中に置くスーパームーン

宮野 清子

窓ひとつ咲いた咲いたよ深緑

塩釜アツシ

フリルのカーテン若い夫婦が越してくる

宮野 清子

席題 「ワイン」

宮野 裕 選

特選

雨の日のワイングラスはジャズが好き

及川洋一郎

秀逸

青春の失恋宥^{なだ}めたロゼワイン

有原すみれ

五十年良く紡いだとペアグラス

藤川 忠巳

世の中がどう変わろうともまずワイン

山口 耕作

佳作

乾杯はなまって語ってまんずワイン

照井 地蔵

寝かすほどワインも俺も丸くなる

有原すみれ

毒舌を吐いて笑ってワインの日

塩釜アツシ

本日はワインで締める誕生日

塩釜アツシ

今もなおワインの里に名医あり

照井 地蔵

シルバーでワイン農家の多さ知る

畠 美香

飲み比べ地元ワインが最上級

畠 美香

柔らかい心温める赤ワイン

山口 耕作

涼風がワインの里で深呼吸

藤川 忠巳

雨ならばワインと決めた待ち合せ

及川洋一郎

令和七年度市民芸術祭第十九文芸大会

「詩」 入選作品

照井 良平 選
牛崎 敏哉 選

芸術祭賞

時の欠片

英 阿音子

暗闇の奥の方へ
葬列のように
時の欠片が続く
きちんと並んでいる訳ではない
からかうように
遊んでいるかのように
時の欠片が続く

もし、踏み外したら
奈落の底へ一直線
覗き込む勇氣はない
踏み外さないように
必死に踏みしめて行く
踏みしめた欠片は
あとかたもなく消えていく
後戻りは出来ない

前に進むほかないのだ

ゴールは見えない

あと数歩かも知れない

まだまだ先かも知れない

時の欠片がつぶやいた

誰だって

自分のゴールはわからない

わかった時はそこでおしまい

時は無限大だけど

生きるものすべてに

ゴールがある

さあ 明日を信じて

前に進もう

後戻りはできない

進むほかないのだから……。

優秀賞

記憶

有原 すみれ

記憶はわがままで

憶えていたことはすぐ忘れ

忘れたいことや厭な記憶は忘れない
何度も何度も蘇るのだ

幼かったころの記憶がだんだん薄れ
楽しかった想い出が消えていく

歳をかさね残っている記憶の脆さ
危うさは増すばかり

脳の中には記憶の番人がいて

この想い出はサクジヨ

この想い出は一時ホリユウ

この想い出はホゾン

番人は融通がきかない

私の意思とは無関係に振り分け

サクジヨ、ホリユウ、ホゾン

頭の中は厭な記憶で満杯になる

楽しかった記憶はサクジヨ

このままでいけば頭の中は

厭な記憶で満杯になる

やはり番人は必要だ

海馬の許容範囲は限られている

番人は与えられた仕事をこなす

サクジヨ ホリユウ ホゾン

振り分けながら番人は知っている

いずれホゾンもホリユウも

無になることを

やがて頭の中は空っぽの
お花畑になるのだから

奨励賞

空がほしい

永田 豊

ある日全くいつも通りのある日

テレビの画面を映像と言葉が流れた

「空がほしい」と一人の少女が言い

「戦争はゲームじゃない人が死ぬ」とも

言って流れるように消えた

何一つ変わらない私のある日

果てしなく広がる空が窓を覆い

その空の下にいる私

無限のようなへだたりに守られている私

この言葉を耳にしてどんな痕跡が

世界に残ったのか

私の心はかすり傷さえ負わない

日頃の挨拶のように流れて行く

少女は平和がほしいとか 安全がほしい

とかではなく 確かに空がほしいと言った

少女の頭上には空がない

少女の空は奪われている

奪われる空の映像が流れた

ロケット弾が火を噴き

空を切り苛み飛んで来る

何度も何度も少女の空は切り取られる

彼女らは地下室で学んでいる

命が危険に晒される中

命と同じように大切なものを手に入れる

ためにこそに違いない

アナウンサーの声が流れて来る

「それは知らないうちに忍び寄り やがて

居座ってしまう」といつもの穏やかな口調

少女たちは学ぶ

平和や希望の本当の姿をしつかりと

つかみ取るために そして

本当の空の下で生きるために

私は日常に帰って行く

ほんのかすり傷のような痕跡を胸に

佳作

笑い話

朝倉 了子

ある朝

日課のコーヒーを飲みながら

夕べのテレビの録画を見て

届いたばかりの新聞読んで

ゆっくりしてから

「さて 顔を洗うか」

私の朝は早い

今に始まったことではない

夫は「電気がもつたいない寝てる」

洗面所の鏡の前に立って

「えっ！」

ブラウスのボタンの掛け違い

何？ これ？ 私が？

夫には 年だからとは言わない
言わせない

今日はグランドゴルフの日

仲間の皆に話そう

「貴女らしい」と爆笑喝采

それともシラーとして

「ある ある」と言うだろうか

皆に聞かせよう

そうしよう

そうして今日も楽しもう

手土産は

笑い話だ

ひそんでいる残酷心

伊藤 諒子

ひと思いにやってしまった方が

よかったのだろうか

じわりと毒をしみこませ 徐々にやって

よかったのだろうか

飛び回って目障りだ

膚に止ってカサカサ手足を擦るので

苛々の限界だ

とにかくやってしまわなければ・・・

カーテンにしがみついていた奴に

これでもかと殺虫剤のスプレーを長押しした

しばらく手足をフルフルさせていたが

とうとう 動かなくなった・・・

(従わない奴らは始末しろ

正義なんぞ無用だ

ターゲットを見定め 手段を選ぶ

ともかくこつちの益が一番大事

邪魔なものは潰してやる

思いのままにひねり潰してやる

血走った目で見下している

手にした権力はすべての上

高慢な数個の目がぎらぎらと光る)

カーテンを掴んでいた力が尽きて

蠅は床の上に落ちた

動かなくなってしまった

やった 仕留めた

残忍な心がいともたやすく沸き上がり

手を下す

残忍なところは

いつだって ずっと

私の奥にも潜んでいるのだ

愛犬

河津 詠太郎

夜半に

確かに雨の音を聞いた

それはシャーシャーと言う音で

細かな雨のようだった

シャーシャーと

ずっと続いていた

いつかまた眠りにおち

そして

早々と目覚めた

雨は

まだシャーシャーと降り続いていて

ゆいは

小屋に繋いだ長い紐を引きずり

小屋を出て

細かい雨の中に四肢を伸ばし

横たわっていた

ゆいつ

私は叫んで抱き上げると

もう

四肢を伸ばしたまま

雨に濡れそぼち

毛の固まったその先端から

雨粒が滴り落ちた

体はどこを触っても硬い

ゆいはとつくに

魂を天へ返したのだ

バスタオルで体を拭き

半分開いたままの口を

少し力を入れて閉じ

そつと寝かせた

いつもは紐を引っ張り

先へ先へと

散歩の足を急かせたのに

このところずっと

私の後ろから

いやいやでもするように

恨めしげに

寂しい視線を私に向けて

尻尾を下げたままついて来た

訳もなく

同じ所をぐるぐる回ったりもした

そして昨日もそうだった

やはりそうだったのか
十五歳のゆいは

ついに

秋の冷たい雨の中を

これから行くべき所を探そうと

小屋を出て

紐の長さに円を描いて

あの

シャーシャーの雨の中を

ぐるぐる回ったのだろう

降り続くあの冷たい

雨の径を辿って

きつとゆいは

天へ帰ったのか

気が付くと

夜半からのあの雨もやみ

東の空が明るみを帯びてきた

私は

いやに重いゆいの

その硬い屍を抱きしめた

令和七年度花巻市民芸術祭第十九回文芸大会

「随筆」 入選作品

野中 康行 選
山口トヨ子 選

芸術祭賞

道

大森 憲孝

高校生の頃、部活動のトレーニングで、よくロードワークに出掛けた。毎回決まったコースを走るのではなく、往復で約10kmになるような目的地をその都度決めるのだが、ひとつだけルールがあった。それは、「往路と復路は同じ道を通らないこと」。先輩から受け継がれてきたそのルールを私は気に入っていた。「自分達は決して同じ道をたどらない」。そんな風に勝手に解釈して、悦に入っていた。

あれから三十年が経ち、週末の早朝の日課にしている散歩でも、今だにあのルールが生きている。目的地を定めず気の向くまま歩き、時間と体力から、今日はここまでと判断しても、そのまま踵を返さずに必ず別ルートで家に帰る。

ある日、小学生の息子も一緒に散歩したいと言うので家を出たのだが、二十分も歩かないうちに疲れたから帰りたいと言う。今回はやはり仕方ない、来た道を戻ろうと百八十度向きを変え、ついさっきまで背にしていた太陽を真正面に迎えたその瞬間、視界に飛び込んできた景色に思わず息を飲んだ。初夏の朝日を強烈に浴びて鮮や

かに映える草の緑と、緑の上に静座してキラキラと輝く無数の朝露の水晶。

どれくらい見とれていたろうか、息子の「帰ろ。」の声で我に返った。帰途を歩きながら、「同じ道をたどるのもわるくないものだな。」と、自然と笑いがこみあげてくるのをこらえていると、息子が不思議そうにこちらを見ている。私はどう説明しようか考えを巡らせたが諦めて、「きれいだったね。」とだけ言った。すると息子はこくんとうなずいて、スタスタと前を歩いて行く。その背中を見ながら私は、これから先、もし彼が自分の進むべき道に迷うことがあったら、このときの話をしたいと思った。「同じ道をたどらないのもいいけれど、来た道を戻るのも、わるくないかもしれないよ。」と。

優秀賞

短歌を始める

高橋 恵理子

花巻市の矢沢地区、胡四王短歌グループに誘われて短歌を作るようになって一年が経つ。手の指を折り、五・七・五・七・七と三十一文字にする。月に一度の例会では、ひとり三首ずつの作品を出し合う。それぞれの近況や感動が想像できて楽しい。作者を伏せたまま選び、投票するから尚のこと、盛り上がる。

まさか自分が、父と同じことを趣味にするとは思ひもなかった。

若い頃から短歌に親しんだ父だったが、家族の中ではあまり受け入れられなかった。兼業農家のわが家は、両親が会社勤めをしながら、田畑を続けて来た。今よりずっと手のかかる農作業だ。天気に関係なく短歌会に出かけて行く父と、留守を預かる母はそのことでよく言いあらそっていた。

昨年の夏、わたしは耳石が剥がれることから起るめまい症を患った。真つすぐに歩くこともできない。普通の生活に戻るのに、リハビリも含めて三か月ほどかかった。横になり体を休めながら、思いついたことばを書き留める。ひとりで静かにできる短歌作りが、寂しさを紛らしてくれた。

今年の夏は、初心者向けの短歌講座を受講した。北上詩歌文学館で、全三回の講座。講師の先生は宮城県在住の梶原さい子氏。小学六年生の男の子も参加していた。テレビゲームやアニメのことなど身近なことを、上手にまとめている。他の人の作品の心情を汲み取るうとする彼の姿勢にも感心しきりだった。

盛岡と一ノ関からは女子高校生たちが参加していた。文芸部のクラブ活動の一部に短歌があるという。車窓から見える田園風景や学校の進路相談のこと、恋のこと……。その語彙や発想の豊かさにすっかり魅了された。

今年の短歌甲子園で、盛岡三高が優勝したというニュースは、何だか知り合いのここの様でうれしかった。「すごい」と唸つてしまった。全く年齢も違う人たちから、刺激を受けて、わたしは少し若返った気がしている。

奨励賞

上條恒彦と労音

藤原 洋三

七月、上條恒彦が八十五歳で旅立った。

昭和四十年代前半、東京労音（東京勤労者音楽協議会）で活動していた私は、新宿の歌声喫茶「灯」を訪ねたことがある。うたごえ運動は少し下火になっていて、彼はいなかった。

彼は、松本の高校を卒業後、上京。住み込み店員や新聞配達、サンドイッチマンなどをしながら、「灯」に週六日、一日に五十曲以上歌ってバリトンの歌声を鍛えたという。

その後、労音に勤務。歌手としてデビューするきっかけを掴んだ。私が彼を知ったのは、「さとうきび畑」（寺島直彦作詞・作曲）だったろうか。沖縄戦が舞台の反戦歌で表現豊かな歌声は、歌声喫茶でも歌われていた。

労音は、戦後まもなく大阪で生まれた。活発な組合活動を背景にして、当時、高嶺の花の音楽会を一般の人々にも開放する運動だった。「良い音楽をより安く多くの人に」のスローガンで、専門家と協力して音楽会を主催した。昭和三十五年、永六輔作詞、いずみたく作曲のミュージカル「見上げてごらん夜の星を」がヒットし会員数六十五万人を越えた。全国に広まり百九十二団体までになった。

私が二十代で故郷に帰って入会した北上労音では、毎年夏に田沢湖音楽フェスティバルがおこなわれ、その年、上條恒彦と小室等が出演した。上條恒彦が「六文銭」と組んで歌った「旅立ちの歌」が

世界歌謡祭のグランプリを取った後で、秋に北上でコンサート予定の彼らにインタビューした。後で録音したテープを聞くと酔って質問したせいかな言葉がしどろもどろで、よく彼らに怒られなかったなと思ひ返すと彼らもまた酔っていたのだった。

うたごえからスタートした上條恒彦は、戦後八十年歌い続けた。私たちは彼から勇氣と希望をもらった。目を閉じると、人懐っこい大きなひげ面と包み込むような力強い「木枯らし紋次郎」の主題歌が聞こえてくる。

佳作

キャットシッター

多田 聰子

娘の友人一家が五月の連休に旅行するというので、一週間猫の世話を引き受けることになった。ベビーシッターならぬキャットシッターとでも言うのだろうか。

事前に猫と対面した。雄の黒猫で名前はクロニャン、体重八キロの巨漢である。しかし、性格は驚くほど穏やかである。もとは野良だったらしいが、そんな様子はどこにも見当たらない。

さつそくシッター開始となつて、朝と晩の二回猫宅におじやました。朝は餌をやつて外に出す。意外に大変なのは夕方だった。たいがい猫は玄関先で待っていた。家の鍵を開けて中に入れ、食事をさせる。次にトイレのため外に連れ出し、しばらく遊びに付き合う。

寂しかったのか付きまとつて離れない。そんなこんなで夕方は一時間以上かかった。

そんなある夕方のこと、待っているはずの猫がいない。名を呼びながら家の周りや広い庭園を探し回った。もしや交通事故や猫のケンカに巻き込まれてはいないかと不安が押し寄せてきた。と、その時、田んぼのあぜ道に何か黒いものが見えた。なーんだ、そこにいたのか「クロちゃん」と呼んで走りかけると、なんとそれはピョンピョン三回ばかり跳ねて空に飛んで行った。

暗闇がおし迫つて、何事もなかったように猫はゆつたりと庭先に現れた。心配したお返しに手荒くなでさすつてやった。訳を聞けないのは少しもどかしい。

犬は人に付き、猫は家に付くと言われるが、このクロちゃんときたら両方かもしれない。八歳くらいと聞いたが、人の言うことが分かっている風にも見える。

別れの朝は小雨だった。車庫前で毛繕中のクロちゃんに「きょうはご主人が帰ってくるよ」と告げた。窓越しにクロニャンが黒い点となるまで見続けた。そして今、クロニャン屋敷の杉木立を遠くから見ている私である。

マジックアワー

英 阿音子

長年連れ添った夫を看取り妻の役目を終えた。しばらくもねけの殻のようになってしまった。半世紀以上も苦楽を共にしてきたのだから当然なのだが、まわりつく寂寥感、虚無感、なかなか離れようとしな、一年も経っていないのだから、日にち薬が必要なんだと自分自身を納得させていた。子供たちはそれぞれ家庭を持ち母の役目は終了。今、妻の役目も終了。残り少ない私の人生、そうだが、今が私のマジックアワー。マジックアワーとは、日の出前後と日の入前のわずかな時間帯、空が魔法のように美しい色に染まる現象のこと。人生の最後のほんの一瞬の輝きがマジックアワーだと思う。いままでのしがらみから解き放たされた今の私、残された時間は少ないけれど、悲しんでばかりいてはもったいない。一歩前へ進まなければと思うようになった。

私に出来ることは限られている。まずは健康でいること、これが何よりの使命、八十路半ばになれば身体のおちこちに不具合が出てくるが、これは自然なこと。なだめながら付き合っていかなければならない。

さて、私のマジックアワーをどお有効に使ったらいゝのか思案をめぐらす。たまたま立ち寄った近くの図書館、以前はよく利用していたが最近ほとんど利用していなかった。館内に入った途端、しばし感慨にふけた。書棚の本たちからお帰りなさいと声を掛けられているように思えた。忘れないで覚えていてくれたんだ、待ってい

てくれていたんだね。

その日から、図書館通いが始まった。歩いて十五分位のところ、ウォーキングにも最適だ。行き帰りに会う友人、知人たちとの会話、図書館で出会うなじみの人たちとの会話、近くのカフェまで席を移し話題は尽きない。読書の楽しみとおしゃべりの楽しみ。そして、ウォーキング。私のマジックアワーを彩る「三種の神器」この足が元気な内は続けたい、続けなければいけないと思っている。

一軍を照らす存在

川上 莉緒菜

スポーツには、ベンチやスタンドに入れる人数に限りがあったり、試合に出ている人・出ていない人がいたりする競技がある。その中で様々な思いを抱える選手がいる。私もその中の一人だった。

私は中学校に入学してからソフトボールを始めた。練習しているうちにもっと上手になりたい、そして高校でも続けたいという思いが強くなった。中学三年生になり、ソフトボールを続けられる高校を探していた時、両親に花巻南高校の見学をすすめられた。見学をした時、お互いに高め合う姿や上を目指し努力する姿を見て、下宿してでもこの学校でソフトボールがしたいと思い、入学を決めた。朝から夜遅くまで練習し、ついて行くのに精一杯だった。他の人に比べて技術がなかった私だが、先生は大事な場面で一点を決める役を与えて下さった。二年生からその役を全うし続けたが、レベルの

高いチームについて行けず、迷惑をかけてしまったことの方が多かった。三年のインターハイ前、選手としてでなくサポートに回る覚悟を決めた。この決断をするまでに色々な葛藤と戦い、周りに心ない言葉をかけられたこともあった。けれど自分の決めた覚悟は間違っていない。自分を犠牲にしてもチームを支えることの格好よさ、大切さはここまで戦ってきた自分にしか分らない。私にしかできないことがある。私がチームを照らす存在となるんだと前を向き続けた。

私の高校ソフトボール人生は、インターハイベスト8で幕を閉じた。思い返してみれば、楽しい思い出より苦しかった思い出の方が多い。それでも、この三年間楽しかったと思えるのはなぜだろう。チームに欠けていい人は一人もない。試合に出ていない人こそがチームを創り、一軍を照らす。これからの人生においても、私が誰かを照らせる存在になりたい。